

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 伊勢崎賢治 印

学位申請者 Mahommad Jawad Ali Aqa

論文名 Building the State to Achieve Peace: A Moderation and Mediation Analysis of the Effects at the Subnational Context in Afghanistan (2002- 2021)

< 審査結果 >

審査委員会は、主査に伊勢崎賢治（平和構築）、副査として、間寧（比較政治学）、登利谷正人（アフガニスタン政治）、James Short（平和学）、篠田英朗（平和構築）の5名によって構成され、それぞれ専門の見地から論文を精査し、内容を詳細に検討した上で、2023年2月24日に公開の最終審査を行った。その後、論文および最終試験の内容について協議を行った結果、本論文は、本学大学院が学位授与のために定めた基準を十分に満たしており、優れた高い学術性を有していることが確認された。よって審査委員会は全員一致で、Mahommad Jawad Ali Aqa 氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。

論文および審査の概要は以下の通りである。

< 論文概要 >

本論文は、本論文は、2002年以降のアフガニスタンにおける平和構築の試みを、自由主義理論に依拠したものと特徴づけたうえで、それが現地社会と乖離を持っていたことを論じたものである。本論文の前半部分は、主に国家建設に関する自由主義的理論の思潮に関する理論的な精査にあてられる。本論文の後半部分は、アフガニスタンの比較的安定した州と暴力に苛まれている州の実情を示すデータの解析にあてられる。前半部分では、アフガニスタンの国家建設のための国際的な介入が、自由主義的平和構築理論の性格を持っていたがゆえに、普遍主義が持つ限界を内包していたことが指摘される。後半部分では、三つの研究から、媒介分析とモデレーション分析を通じたアフガニスタン現地社会の実情の探求がおこなわれる。第一の研究では、援助の効果が、援助収奪を媒介変数、不満をモデレーション変数とする方法で、明らかにされる。第二の研究では、行政的コントロールの効果がパキスタンとの近接性によって中和されることを示す。第三の研究では、政治・司法への信頼によって示される国家の能力が、腐敗と地方のシェーラとの親密さによって中和されることを示す。こうした分析を通じて、本論文は、地方部における紛争を和らげる国家制度や能力の異なる様々なレベルが、結果における大きな相違をもたらすことを明

らかにする。

本論文は、序論、結論を含めて、8つの章からなっている。

本論文の序章は、論文の背景となっている状況や、論文が目指す議論の枠組みが、リサーチ・クエスチョンとともに提示される。そこで問われるのは、2001年以降に開始された平和構築の自由主義理論の性格を持った国際介入が目指した国家建設が、アフガニスタン国内の異なる安定度を持った各地域の乖離を克服することができなかった理由である。

第1章は、国家建設活動が目指す国家像をめぐる理論の精査を行う。国際政治学や社会学における古典的な研究や、最近の研究が参照される。そして国家の規範的理解と経験的理解、あるいは法的存在と社会学的存在が、規範主義者と実証主義者の間の議論の枠組みとの関係で、区別されるべきであることが論じられる。そこで重視されるのが、国家主権もまた、上記の区別に沿った形で、やはり異なる二つの意味に分化されうると言う点である。

第2章は、国家建設と平和構築の結びつきを論じた先行研究を整理する章である。焦点があてられていくのは、平和構築の自由主義理論、その批判者として現れるハイブリッド平和構築の議論、そして新制度主義の議論である。さらにより実証主義的な研究が、それらの理論動向とどのようにかかわってくるのかも、検討される。

第3章は、先行する章に引き続いて、国家建設に関連する理論的な先行研究の精査にあてられる。国家建設と近代化論との関係、国際的な開発援助との関係、制度構築論が持つ意味などが、議論の俎上に載せられる。背景にある問題意識は、効果的な国家制度の構築というホップズのテーゼが、アフガニスタンで実現する見込みを持つのかという問いである。

第4章は、2001年以降のアフガニスタンにおける国家建設の試みと、絶え間なく続いた武力紛争との関係について、注意を払う。国際介入主体の主導で行われたアフガニスタンの国家建設は、現実に大きな限界を見せたと言わざるを得ない。環状道路建設など地域格差を克服するための試みもなされたが、挫折を余儀なくされた。ロヤ・ジルガも、国際介入と地元文化の融合の象徴とも言われて期待されたが、眼に見えた効果を放つことはなかった。自由主義的平和構築論のみならず、ハイブリッド平和構築も、理論と実践の間に大きな溝を持っていた。この観察が、アフガニスタン国内における安定度の高い地域と暴力が蔓延した地域との間の乖離という現実や、援助収奪や汚職による国際援助の効果の減退という問題を、さらに強調していく。

第5章は、データ解析の方法論の説明にあてられる。より具体的には、データ収集の方法、変数の設定の方法、評価測定の方法などである。特にアフガニスタン地方部のデータの収集の方法とその性格について、注意が払われる。本論文のデータ解析における独立変数と従属変数の説明が行われる。

第6章は、本論文が、研究1～3と呼ぶ三つのパターンのデータ解析が提示される。本

論文が採用するのは、Hayes Process Macro Moderation and Mediation Model である。そして分析前パラメトリック検定から、第 4 章で提示された仮説の検証へと解析は進められていく。研究 1 では、経済的不満の要素が緩和要素となり、貪欲の要素が媒介変数となった。研究 2 では、パキスタンへの近接性が行政コントロールを緩和することが示された。研究 3 では、汚職の要素が人々の行政への信頼度を下げることが示された。DDR には相関性が見られない一方、司法サービスや水へのアクセスは行政への信頼度を上げることが示された。

最終章は、本論文が解明したことの整理と、議論のまとめが行われる。アフガニスタン国内における安定度の乖離は、国際介入主体が主導した国家建設活動によって克服されえないものであったことが示される。南部地域のパシュトゥーンの人々のパキスタンの同民族系の人々との紐帯は、国全体を見ているだけでは必ずしも克明には明らかにはならない平和構築の課題だが、地域的な乖離を視野に入れて分析してみるならば、決定的な意味を持っていることが判明してくる。

< 審査概要および評価 >

本論文で評価すべきは、国際的な国家建設の理論と、現地社会の実情に大きな乖離があったことを、理論面と実証面の双方のアプローチで、浮き彫りにした点である。古典的な西洋政治理論の議論に立ち戻り、自由主義的平和構築がどのような理論的前提を持っているのかを明らかにした。同時に、アフガニスタンの安定した州と暴力度の高い州の双方から集めたデータの解析を通じて、現地社会の実情が、理論的な前提とは乖離したものであることを、実証的に明らかにした。その作業を実施する過程において、本論文が、伝統的な政治理論とデータ解析の二つの異なる方法論を駆使して、設定した課題の探求を行った点も、評価されるべきだろう。ただし本論文の問題点としては、理論的議論を通じた観察と、データ解析の結果との間の乖離が、どのように発生してきているのか、アフガニスタン社会はどのような事情で国際介入を受け入れないような社会になっているのか、といったことまでは解明できなかった点にある。本文で示された国際的な平和構築活動と、現地社会の実情との間の乖離は、果たして埋めることが可能な乖離なのか、といった政策的課題に対する示唆は、限定的である。

もっともそれは当然に解明することが困難な問題であろう。これらの問題点は、学位申請者にもよく意識されており、論文においても配慮がなされていた。審査における質疑応答でも真摯な対応が見られた。指摘された問題点は、本論文の本質的な価値を根本的に損なうものではないという評価では、審査員の意見は一致した。

最終試験は 2 月 24 日（金）の 10 時から 12 時まで約 2 時間にわたり ZOOM を用い公開で行なわれた。審査委員から提起された問題点等に対しては、Mahommad Jawad Ali Aqa

氏から真摯で的確に応答がなされた。審査委員から論文の内容に関して提起された質問は、パキスタンなどの近隣諸国との関係の影響の評価、アフガニスタン国内の民族構成の影響の評価、食欲と不満をめぐる研究などの関連する先行研究との関係、国際介入や国際援助のあり方に対する含意、データ解析の手法の妥当性、データ収集の実際的な困難と限界の克服の方法、などをめぐるものであった。Mahommad Jawad Ali Aqa氏は、いずれに対しても、妥当な回答を提示した。これを受けて、審査委員会は、論文が、本学大学院が博士学位授与基準としている①研究テーマの妥当性、②問題意識の明確さ、③方法論的一貫性、④先行研究との関係、⑤論旨展開と文章表現の妥当性を十分に満たす学術性を持っていることを確認した。よってMahommad Jawad Ali Aqa氏に博士（学術）の学位を授与することが適当であると判断した。